

# BOOK

岩間一雄 著

## 「毛沢東 その光と影」

(未来社、4600円、2007年、398頁)

石塚 秀雄

当研究所の会員でもある岩間一雄氏が出された本である。評者としては、一夜にして通読するほど感興をそそられて読んだ。1960年代、評者が高校生の時代に、毛沢東は革命的人物として大きな存在であり、革命を夢見る1人として評者も『矛盾論』、『実践論』、『文芸講話』、さらには『毛沢東選集』などを曲がりなりにも読み、エスペラント語の『人民中国』を中国から購読し、北京放送を夜な夜な聞いていたものであった。

現在、私を含めて一般の人にとって、毛沢東は中国革命の英雄であるが、文化大革命の失敗をふくめて、いわゆる中国史における英雄列伝的な人物となって毀誉褒貶半ばする人物像として受け止められているであろう。毛沢東の「光と影」は、近年出版されたさまざまな毛沢東暴露本によって、その怪物的な人物像が定着してきていると思われる。

本書は、基本的には、1920年代までの毛沢東の思想形成の過程について朱子学の影響を中心に論じた学術書である。本書の題名は恐らく出版社が営業戦略上つけたものであろうか。本書ではいわゆる中国建国以降の政治的思想的闘争における毛沢東の思考過程については、付随的に言及しているにすぎない。

毛沢東といえども、はじめから権力を握りヒーローであったわけではない。彼にも思想的師匠はいたのだし、思想形成過程には紆余曲折はあったのである。それは彼自身の内面的問題ということもあり、また中国の当時の思想的政治的状況の到達点との相関という面もあったのであろう、ということによって類推することができる。

もとより評者は中国思想史、中国革命、毛沢東についてなんら深い知識はなく、ひとりの一般読



者の立場として評者を引き受けたのであるが、しかし、当研究所の書評としての特徴的取り上げ方をしなければならない。それは、第1に、毛沢東におけるアナーキズム的傾向からマルクス主義的傾向への移行という問題である。これは毛沢東ひとりの問題ではなく、当時の中国の思想界の傾向を反映したものであったのであろう。

明治以降の日本も同様であるが、中国もまた近代化のために西洋思想の導入が進められた。本書では毛沢東の先生として、楊昌濟という人物が紹介されている。この人物はエドガー・スノーの『中国の赤い星』の中でも触れられている。(ちなみにスノーの前妻、ヘレンはニム・ウエルズのペンネームで労働者協同組合運動の理論家であり、スノーらはワーカーズコープを工合として抗日運動の中で推進することに寄与したのである)。楊は

日本・イギリス・ドイツに留学した倫理学者であり、『西洋倫理学史の摘録』を著し、カントの人格論、コントの人道論、シュライエルマハーの宗教論、ショーペンハウアの意思論、ルソーの社会契約論などを祖述したという。

評者は朱子学や陽明学のなんたるかについては門外漢なので、本書による毛沢東におけるそれら東洋思想と西洋思想との融合という肝心な論点の理解がおぼつかないのは、一読者としてなんとも残念な気がするが、しかし、評者として気がついた点を指摘してその穴埋めとしたい。

それは、1910年代の後半の中国思想界における社会思想の傾向についてである。これは毛沢東も最初は、楊先生の影響をうけて「理想主義者でありブルジョア民主主義者」であったというのであるが、これは具体的に何を指すのであろうか。本書の91頁に楊昌済の1919年11月6日の日記が載っている。1919年はすでにロシア革命が起きており、ベルサイユ条約で日本は中国の山東半島の占領をもくろんだりした。中国には五四運動の昂揚があり、当時26歳の毛沢東もその熱気を受けて、『湘江評論』を発行したという時期である。

本書91頁の楊の日記には時事新報の抜き書きがある。見出しは「自由正義と財産」。以下引用。

「社会の全財産はいかなる方法を以て個人に分配するか、はじめは自由の法則でやるか？ はた某形式の政府に分配の全権を委ねるか（公産主義）？ あるいは万人随意にこれを取るか（共産主義）？ そもそも一定限度の私有財産を各人に認めるか（分産主義）？ 正義は多く物質に属し、自由は多く精神に属す。組合社会主義の将驍コール氏は、現代の根本的欠陥は、貧乏にあらずして隷従にある。我々の要求するのは自由であり、自治であり、自らが主人公となる制度である。今日進歩が機械的科学的生産状態にあるとき、いやしくも広義の共産主義を実行した場合、はたして窒息するところがないだろうか」、ここまでが時事新報の記事で、以下は楊先生のコメント。「共産主義社会の成立のさい、賃金制度からの強制からはたして解放されるのか、労働者ははたして忠実に労働するだろうか、今日の状態よりも悪くならないだろうか」。次に著者岩間氏の付言。「彼（楊昌済）の目の前に、嫌でも共産主義が姿を現わし

ており、少なくとも地主佃戸制をどのように考えるかが、問題として彼の前にクローズ・アップされてくるのであろう」。

新聞記事にでてくるコールとはG. D. H. コール（Cole, 1889-1959）であろう。彼はフェビアン協会の会員であり、ギルド社会主義、ロバート・オウエンなどについての著作があるイギリス協同組合思想研究の先駆者として日本でも知られている。時事新報の記事は、すなおに読む限り、「組合社会主義」により好意的である。この場合の組合とはギルドとして労働組合とも読めるし、また協同組合とも読める。記事で面白いのは、政府の再分配機能にまかせるのを「公産主義」と称し、「共産主義」を「万人随意に財を取る」ものとしていることである。ここでいえることは、「共産主義」は理論的側面から捉えられているのであり、ソビエトの実態から見られていないことである。そして楊先生のコメントは、記事の組合社会主義的発想に共感を示しつつ、ソビエトの実態に連想が進んで、共産主義にあっても労働者は賃金制度の強制から自由になれるかという懸念を示したものであろう。

そこで岩間氏のコメントは楊先生が地主制度をどのように位置づけるかという問題に直面していると述べているが、確かに本書の流れからはそれが強調されることは当然と思われるが、評者としては、このところは、是非、協同組合主義思想、社会的経済、非営利・協同セクターの問題に触れてもらえたらと思う。それを飛躍といふなけれ。というのも、本書の範囲ではないが、中国革命後の人民公社運動問題および合作社の試みは中国社会経済制度における「協同組合化」の重要な試みであったからである。しかし議論は深まらなかった。地域コミュニオンである人民公社はいわば、フーリエのファランステールやオウエンなどのニューハーモニーなどと同種の実験であったといえよう。ちなみに劉少奇は『協同組合（合作社）論』を書いている。

こうした議論の過程は単に、アナボル論争あるいは無政府主義と共産主義という政治的議論に収まるものではないであろう。いいかえれば、空想か科学かという単純二分法ですましてはならない現代的問題でもある。

世界的に革命理論が急激に政治化していき、経済社会制度についての考察が弱まったのは、まさに1920年代からファシズムおよびあらたな帝国主義との戦いによってであったと思われる。毛沢東が指導者として「怪物化」していく過程は、激烈な内部闘争の過程を伴った。これはこれとして別の感興を催されることである。

中国人はいまや世界でもっとも資本主義人的人間であるといわれているが、中国の社会経済制度の歴史的ありようはどのように評価すべきなのだろうか。

著者岩間氏は次のように述べている。「もし毛

が、清風運動以下の思想錬成過程が生み出した、無数の冤罪、誤、偽、仮の意味、その過程で産み落とされた精神深部の傷などの意味や、党籍を剥奪されていった知識人たちの党とその指導者に対する批判の意味を真剣に考えたならば、またその後の過程で繰り返し生み出された『修正主義』の意味内容を、レーニンの土地国有論や労農同盟論の理論的連関の中で考察したならば、中国革命史はまったく別のコースを辿ったかもしれないと私は考える」。

(いしづか ひでお、研究所主任研究員)

### 【事務局ニュース】3・機関誌バックナンバーを進呈します

『いのちとくらし研究所報』2号～14号を着払いにて無料進呈しています。

希望者は事務局までFAXあるいは郵送にてご連絡下さい。(コピーしてお使い下さい)

FAX送付先 03-5840-6568 総研いのちとくらし事務局行

・希望号数(2-14号で号数をお書き下さい)( )号～( )号

・希望送付部数 各( )部

・送付先 郵便番号 〒

住所

氏名

電話番号 ( )